



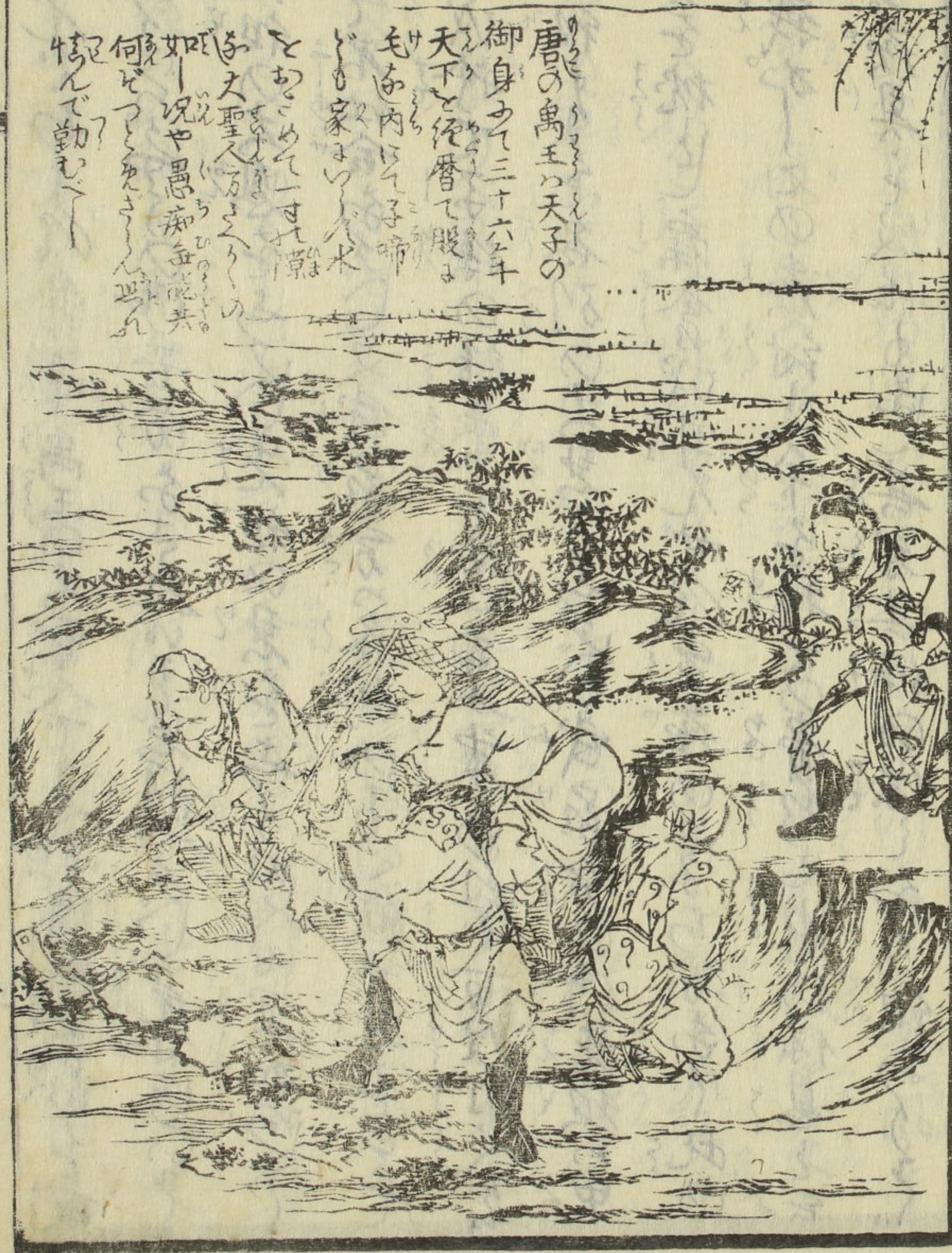
日用心法鈔

下



文選曰。舜帝野死。と。世に舜といふ天子の侯爵あり
 あく。死を迫る勉めあり。漢土史一の聖王とこれよりくの
 如く。況や其餘の人。はとも。履き苦の半く。又禹王の三十六年。
 天下成。経曆とて。股は毛。肉を子啼ども。家より。洪水
 をおさ免む。孔子の曰。禹王あり。せむ。象鼻とあらんと
 のあり。るべし。大聖人方より。疾をひき。いで勉めあり。
 況や。無智。無能の人。何ぞ。勉めざるん。恐れ。懐んで。はとあ

唐の禹王の天子の
 御身より三十六年
 天下を治るる暇
 も内には子
 いも家より水
 をおこめて一すれ
 大聖人なるの
 如く況や愚痴
 何ぞてん勤む



どんむわくべ舜帝禹王の大聖人できつ城取を
るるにやの湯苦勞あされいとあひやうだ。是は
先祖の大恩をあづ。先祖の恩をあづぬ人は要加阿
て不仕合あづ。又武家方の各列のしく城を
命に捨て子孫の後榮をす。あふ半あれ。百姓何人
先祖より各列の大恩にあづ。武家方の所先祖甲
胃を枕し。森食ひ井んぜ。皇座のろちもあ。此の
合戦かこの所討し。命を捨ての骨おこすの体息と云
西。所具も改帳あ。其身其後の体あり。誰ありと

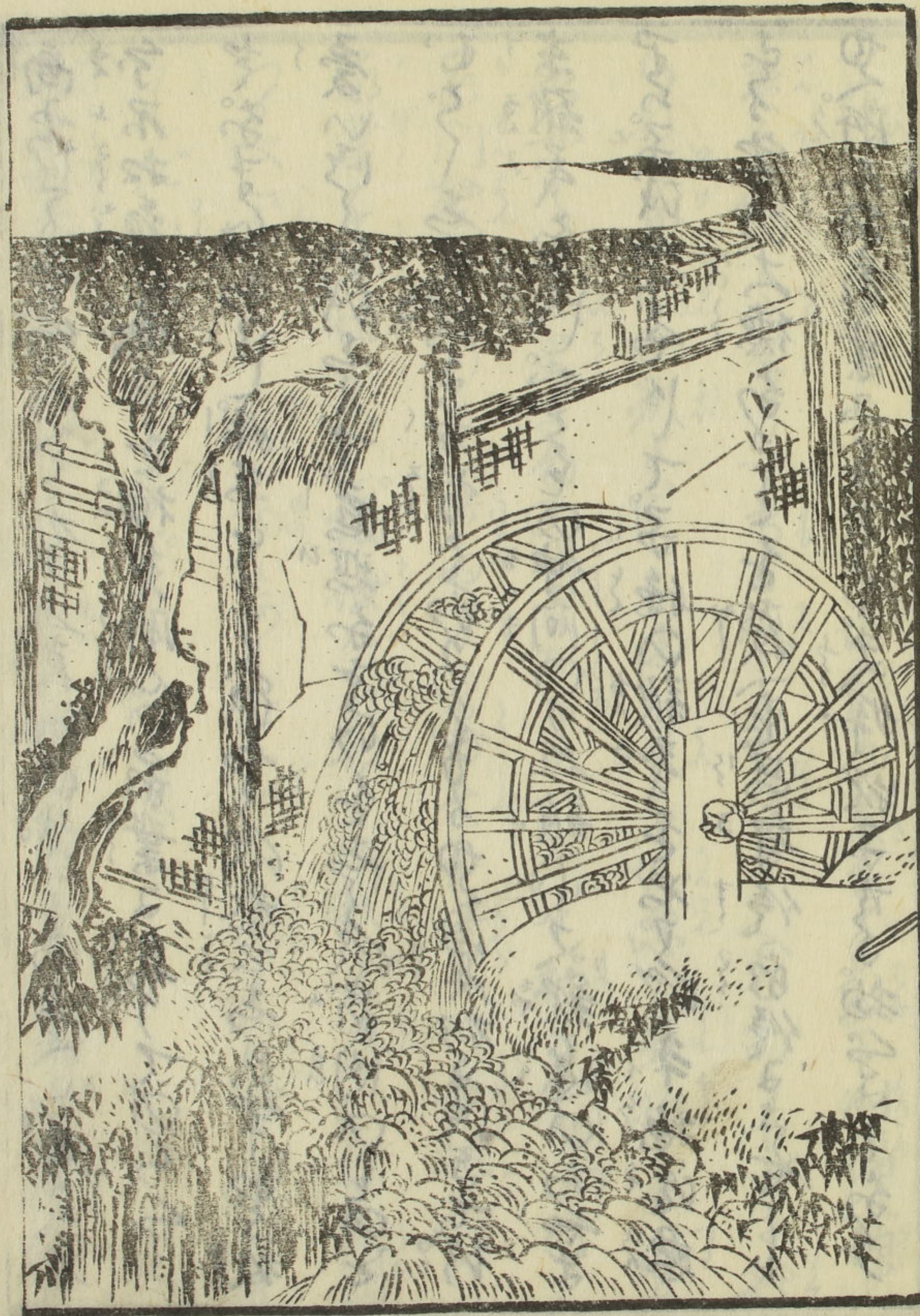
疾も若替等を持運ぶ。是はよ。てあら寒風
吹れ。夏も改帳責られて。所宿する。あふ飯の
は。それをたぐけ。城をきて。それを飲。それ
が。の軍あ。たふも。たす。あふ。其
中。は。の。能考て。一軍あり。若軍
せ。命は。あふ。の。世の。で。の
る。あふ。其。の。合戦。あ
是。の。大。あ。其。大。を。あ
十。万。石。二十。万。石。の。餘。光。を。残。し。今。の。殿。様。遣。は。大

あゝおれをいれ貴氏おてものことといふ祖の親母友人こ
た極めてる百姓何人の先祖といくとも先祖にあらぬ
あり況や武家方の祖先は放ておや。是よりして祖先
祖方の諸君を思ひ、急な大切と思れ敬む。其思れ
敬むといふ。此のおとらえをとらざる。武氏諸侯家を敬む
万民は安んずるはあり。是をすく。あまど附合の由にも
○諸先祖より死させて高枕とおう。今諸君もこれ
はぶ。知れをせつ。うけて吾輩にあさる高枕にて
はお寐しよさ。ばい。先祖の恩を思ひ、其身はゆるみ

あて下民を治りし下々の親王はありぬやうにさきで
 は義子たる人の職分あり是氏身を脩免家をととの
 玉を治るといふ。且又先祖先方の清苦操をいのりお身成
 後生と頼ひむかふなり。先祖先の心ぶたい代いのり。お身
 の清けを祿ぐ人なむなり。何しそ人へあましのくあまの
 志しある人は今世の福寿を増未來の悦樂を求め居るこ
 百姓所人を是れ同一先祖の恩をとりする處なり。
 前白河源定信公の玉女論より。天自ら民を治ると
 わざわざ故は天子をあて。是を治免せむ。天子もかく

天子とて天子を愛して天子の
 の大業を空あきらむることを欲せしめ、若くは天子は私あつて万民の
 おけきをさうするべからず長くて得る積りのばかりひ
 あつて其の身を長くもたえようとするより他人を
 廢して徳ある人を選ばふて必定く人お君たるもの世國
 を論じて天子の中にお立ては百姓の親戚をさへにふすま
 君子あつてもんづから必ず月子二度完済むべし。
 又佛道は六波羅密といふところあり。仏法の大半は其中の
 精進波羅密は出情して佛心を成ぜんとするところなり。

五波羅密を精進ほつゝあてられ成就せし皆是出情し
て勤まよひて成就するべく。其の勤といふは皆共に
して福德の招えく。勤免やぐ。家業くけりきと福ひ
のむといふ事よくあるに
歌部百人選み蓮うが愛白とそ○積出せん氷くもるを
ある。水車。せん。商人職人たりとも。各々積を出してうを
さへんせん。台所の通用淨らる。かくとすろると。水車
のすりう加い。を中央の大晦日は。浄る中わく。う。美
不精子してすろ。されば氷うて浄うぐら。和。白。土農工



あまの秋子伏

守まうすや
老の後の
今浮世

大方のちやの
あまのちやの
あまのちやの



難一多の万苦の切を積て後こそあつるあり。あまの
唱戸の六友世の中波風あつて後せんあかん。あまの
守一とあて。危角人を先なたて。人を難波のつゝ。あまの
いふて。後ろあが。あまのいふて。あまのいふて。あまの
味あつて。身の為は。あまのいふて。あまのいふて。あまの

眠の第は。あまのいふて。あまのいふて。あまのいふて。あまの
貴き。あまのいふて。あまのいふて。あまのいふて。あまの
あまのいふて。あまのいふて。あまのいふて。あまのいふて。あまの
あまのいふて。あまのいふて。あまのいふて。あまのいふて。あまの
あまのいふて。あまのいふて。あまのいふて。あまのいふて。あまの

君子の道は通かへん、
 憂中同言ふごとく世の業をいとあむは憂さるが如し、其
 業の苦を以て飢寒の苦を越すぬぐる。老死の病を
 を苦しまだれを病ひあり、身を苦む、彼が世の苦し
 有し故に縁之時の大至樂を得たり。智者の樂は樂を
 を樂むより樂くする日あり、愚者の樂は樂を以て後
 樂に故樂くするて苦くして後樂くありを樂んでするを
 あらび樂むなり
 出方歌より。昔神明の勅り、世を人の和し世は苦し

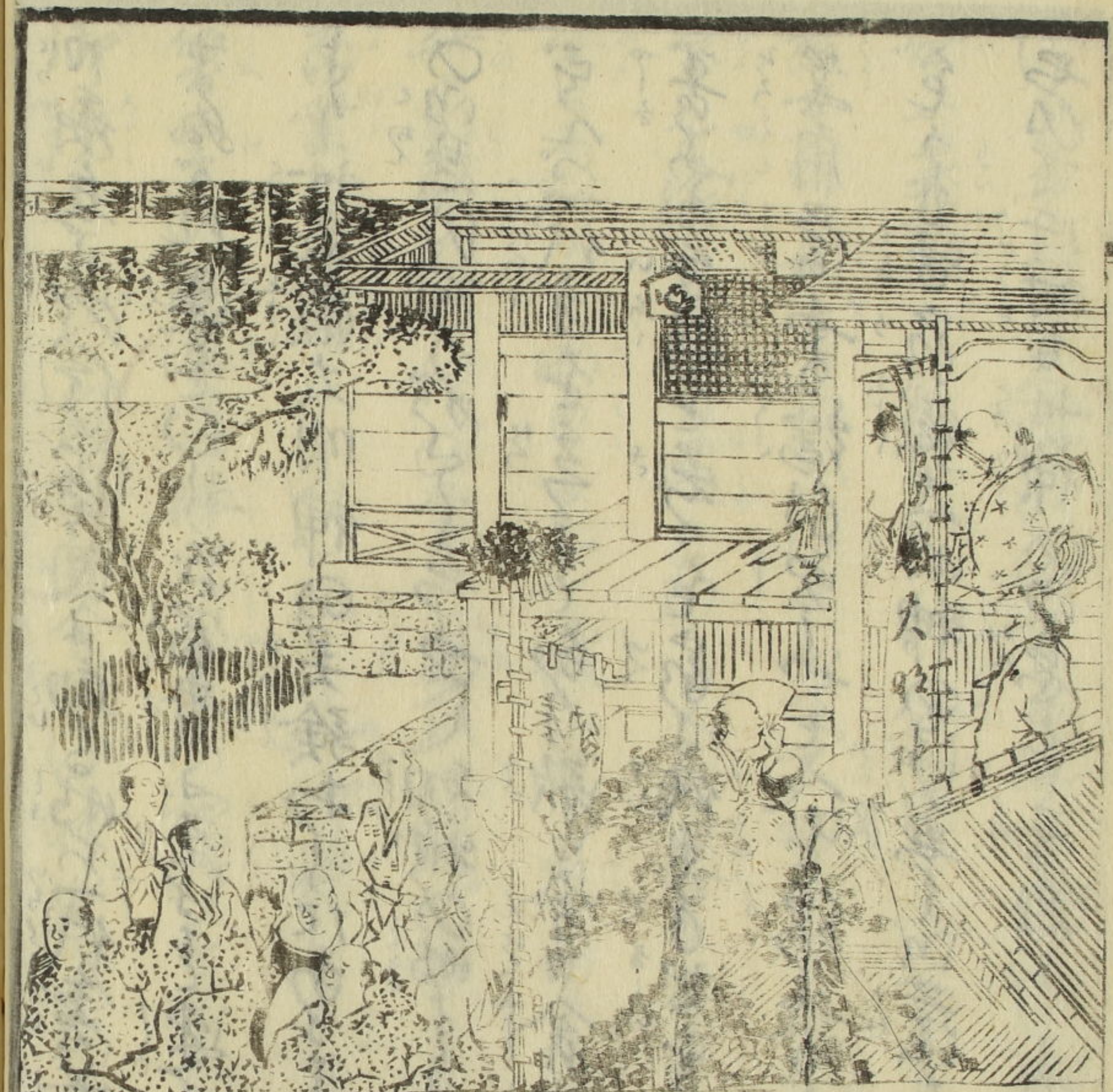
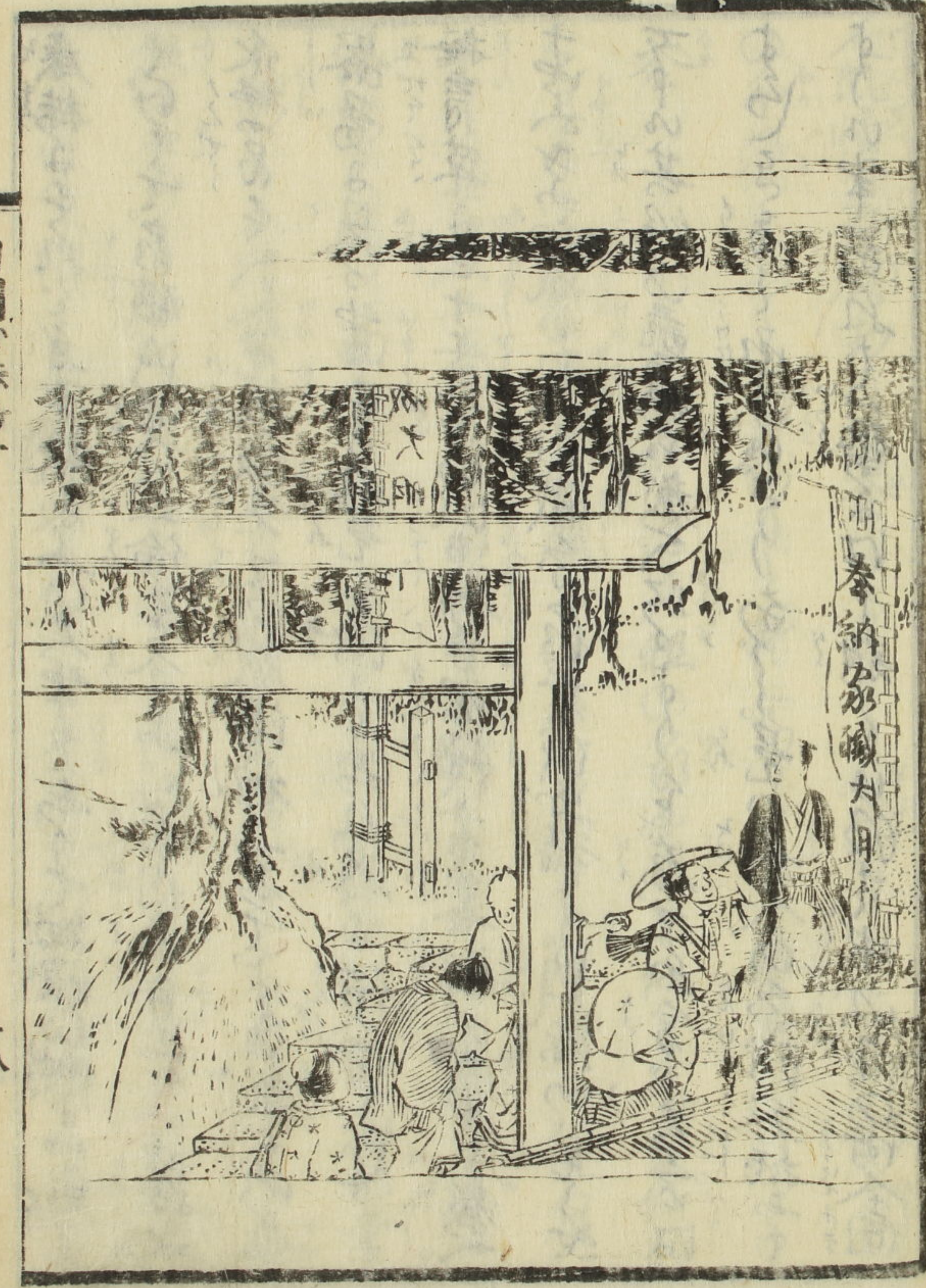
[illegible]

の親れやうに教ひ順うが家業と朋友の交を以て更なる
 要まふ人をよめば時あたけ合のが家業と士は侍
 たるの道をくぐり百姓たるの農耕はるが家業
 あり職人の其職分は情し商人は其商ひの油取あり
 種を出生る家業と士農工商はるが家業大の神を大
 切に信んじて振目あられが家内和合いじ子孫長久に目
 度世を渡るあれづく傳はり難く存たてまつて世
 大の神は只一尊なり大切は信んじていふある人が西の
 又むすい半をやりまふとも振目もあられと神は一身

をおのせしん不礼は家業に勤めてあるがれづくある家
 微運の者も家業といふと難いおれづくある家業大の神
 を家業はそれなりある福者高運の者たるが家業あり
 と目録に其後ある大の神を一日家業はそれなり一日は
 の家業は一日家業はそれなり一日は家の家業あり
 一日家業はそれなり一日は家の家業あり一日は家の家業あり
 あり又一日家業大の神を大切し勤れを忽ち一日は福
 分を得るはそれなり一日は家の家業あり一日は家の家業あり
 の福分を得て難いはして一代大切に家業あり

是れ先ある大福代得て子孫を保じ安樂な世を渡す
 世に盡くしあつたある神佛多しといふもけ家職大明神の
 取の利生あつたあて大切なそれ大切に守る福
 分を祈る半迷あり。又廉畧はすまじ廉畧はす福
 貧あると明りあて減り世に思ふ生神と申す
 家職大明神の半に思ふ信じて日々怠り信じて
 家業を大切とすべし但し神神をありあるは餘
 質素の造酒代捧げ。正の地味をかくも信思奉
 御鏡を備へ家内和合の神神樂代わける清浄はして

日産あるべし信じて固く勤る時一代苦困窮の大難代
 するがれ運をむくま富貴あると迷うあれを初難代
 より家職大明神の具強あつたあてを熟知し神
 の思ひあつたあて初難の時より神の半代
 どんぐり代身をまうとあり難今日食半をまう身を
 其の衣服をまうも家より何もの智さるも讀抄するも
 其用するも信ひあつた人を使ふも病も起るも何
 もの皆家職大明神の清恵も信思あれがあつた
 其の行時神の思をまうくも信思あつた



家藏大明神の初推の時
 一ふ信作も三ふち三依
 今いふ不依作はるまます
 こんさきき肩にひく
 はさきききききききき
 さきききききききき
 神さききききききき
 がききききききき

廉持はそれを見を授けあふの大半とありて初雅の時を励
くびく。お蔵は愛く血倫を令け。お内和合して子孫永
永傳ふべき。是振坂先生の感得神ふてよき教く。り。
客易は思ふ事おれ見を授けられ。老子信ふまじ。
振育草は三十二本の比連のち智徳事要術をよき教く。
十やふふお成ゆ。お蔵は家業の精。熟練の事をせ
て。其の藝の教く。ちより。も。存せぬ方。大方は
より。さ。お。り。い。さ。あ。是。其。人。の。分。身。持。あ。
より。半。あ。れ。た。一。時。は。は。り。難。く。い。ぬ。中。以。下。の。所。人。商

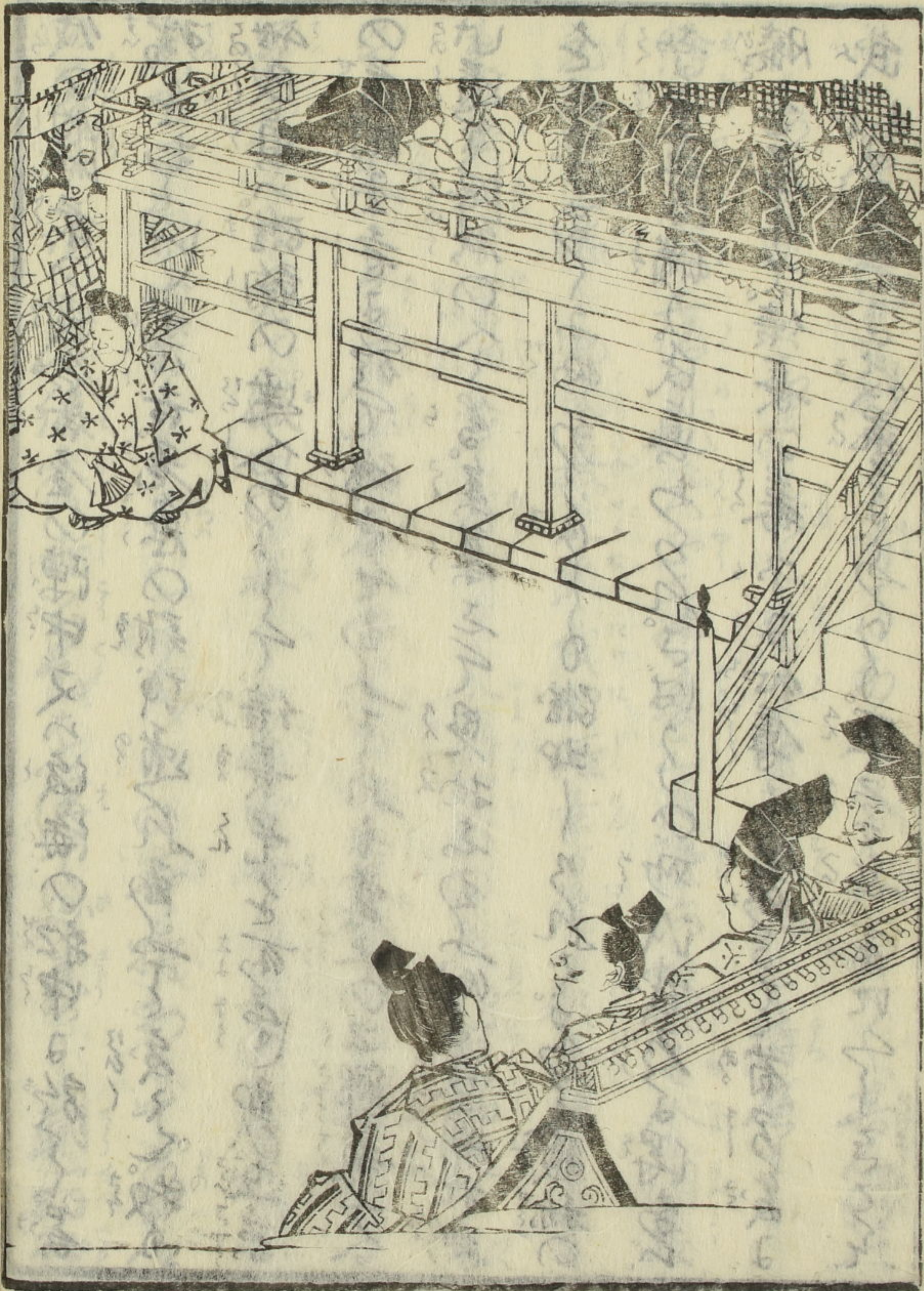
人風情の藝ありて。参り。より。無。藝。は。志。て。商。業。一。向。
の。お。わ。の。も。や。ぬ。男。あ。り。と。せ。し。ら。も。者。の。藝。終。あ。り。と。
参。ら。る。人。より。も。多。く。は。先。祖。の。家。を。す。く。た。も。ち。身。持。
を。上。手。に。て。藝。品。し。お。蔵。は。ぬ。も。目。お。さ。者。と。十。八。九。見。
ま。う。い。士。農。工。商。た。も。お。蔵。分。お。終。く。ち。て。お。の。藝。は。名。氏。
得。た。る。路。の。面。白。さ。半。も。不。存。い。無。縁。の。所。人。あ。り。お。業。
お。終。く。ち。て。藝。終。は。あ。る。い。好。ま。し。か。づ。多。く。い。お。終。の。藝。
終。は。お。ら。ん。を。い。れ。て。お。業。も。お。の。け。く。廉。界。は。あ。り。お。
も。の。に。て。お。蔵。は。り。身。を。失。ひ。先。祖。の。名。氏。け。し。

子孫をあらはる基ひあれ。すつ藝術に學び習ふ事。は。
おゝすじで。文商一層。は。家業を終るおゝく。も。丹保紋。
をせて。り。い。あ。は。

○解の義。あつても海があついでる。海ぬいのが。お業とてん
 ○性相をいふ。うす。性相をいれておろよ。ものが蔵らん
 ○大とら。さうさやわれ動むれば。この日月。恒吉れする。
 人間一生道中記。中人より以下。義を略し。いふ事あるは
 むとあり。是はお遠し。聖人の智者と作せらるは。お業
 に疎く。能動なるを。いふこと。凡そあれが。諸藝修習に

達せしや。家業は疎かぬを。智者と仰せらるるの宜あはれ
人々たるは。代合点して。家業は人代に。智者を以て
振舞はし。是れより。大半のとき。所は。銘じて。忘る。金
ぞ。家職の。かゝる。ごと。も。苦。か。づ。心。あ。次。次。今。川
氏。真。の。半。比。見。ふ。ド。保。一。あ。う。よ。く。を。と。て。藝。能。可。人。を
偏。い。あ。じ。と。く。く。づ。急。度。致。さ。る。一。藝。の。身。を。た。と。る。と
や。う。に。て。藝。能。可。人。と。さ。人。と。も。交。り。又。市。太。名。方。の。流。石。を
扱。く。出。る。と。も。あ。り。是。皆。藝。能。の。徳。に。所。論。無。長。り。れ。ば。追。と
ま。じ。下。り。附。家。職。は。な。く。藝。能。と。ま。く。藝。能。は。あ。る。と。も。の。海

世々無窮なるものありてあれど、えん捨たて。甚ん好む
 何はをあるを考へ、委實半々。後編を待たす
 繪なる同紀二編目。天正二年壬辰二月。駿河の國を今川義
 元の男上総と内氏真。先年長田信玄が爲に。領土狭く。其
 建立義内は漂泊して有り。今川家の名物。而瑞帆と云
 不元と。其藤原の名。其子香の香。信長と。信長と
 道。おつた。先て。織田の幕下は属。其子鳥の香。信長と
 天下はあつた。其子鳥の香。信長と。信長と
 の名物。何は。後秀吉と。是を得て。秘藏。朝冠。



疎はるは業ありと朝の者の多うけは半。おれは
あはるよりあはる。何れもおれ。お業のいはんをさ
る。智恵はあいて親縁とて家を移し身はあはる
あてつ。何やあの業あつとも。何れ面白く人のたふ
やう。人の業とあつて。人の下はく者あり。畢竟
家徳と同一とて。業は商賣と。又家を移し身はあ
て。業はあつて。光りて。入見半あり。おれはあつて。身
を治先にて。業はあつて。何より。あはるられ。もは
何れ。錦光。隆志の白。業は身をたふ。親縁。不仕合

やう。愛のこあはる。お業はあり。業はあつて。も
半。あはる。業の青董集はあつて。日々永代。あ
昔連。お業の業は法。泉州。おれはあつて。あ
時。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あ
胡椒。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あ
二文。清光。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あ
や。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あ
風雅。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あ
あ。あはる。あはる。あはる。あはる。あはる。あ

おれはあつて

あはる

○よき人ともふぶ歌ひはくちて其正友を考へてなり
○たゝめて終てふなり。兄やよ。是を就を。あふ人の
繪借田は日お迎。おひお庭。世の世にせられつもの
とあり。されずお迎。一。皆同。られた。せられて後習
やて。善育やう。候やうよりて。人お骨柄。たひはお遠
て。世のされず。たひはまき。あり。たひは遠。ひたるやう
ある。是。おの。一。よ。お。皆。初。か。より。皆。昨。言。友。を。撰。
又。何。不。と。え。ふ。は。よ。め。て。あり。世。の。流。れ。も。氏。より。善。育。
育。と。い。ふ。も。友。の。と。あり。ん。が。あ。の。

○子親の。と。て。が。う。て。終。も。あり。悪。友。人。ふ。も。あり。老。と。と。れ
○氏。より。も。と。て。が。う。と。を。就。て。終。を。せ。る。も。子。の。手。柄。あ。れ
世。あ。あ。と。す。く。と。と。と。
利。運。侯。より。く。か。系。の。附。より。よ。き。師。子。陸。ひ。よ。き。友。り
交。り。れ。ば。と。と。人。と。あり。悪。友。あ。交。り。れ。た。悪。人。と。あり。故。に
か。身。の。師。通。と。交。り。る。而。の。友。と。お。比。と。が。大。切。く。候。ま。さ。ん。を
お。え。く。べ。い。る。あ。る。田。舎。の。学。又。より。系。の。悪。癖。と。い。ふ
た。と。の。如。く。身。部。は。せ。れ。一。人。の。学。文。せ。ど。と。も。何。あ。ら
清。く。静。と。ま。て。田。舎。の。学。又。あ。り。終。而。あ。る。如。

孟子墓所のを迎へて蘇れ
 孟子一かひ事所のをある
 孟子のすれを一かひ事所の
 迎へて學者のすれを一かひ
 母所ある事又一かひ事所の
 孟子のすれを一かひ事所の
 孟子のすれを一かひ事所の
 孟子のすれを一かひ事所の



火消をるる所の
 火消をるる所の
 火消をるる所の
 火消をるる所の



○唐でござる。彼方とて。も。都々。村々。と。げ。さ。い。い。と。れ。ど。す。
○又。唐。で。唐。の。人。を。毎。て。縁。有。あ。れ。を。後。追。の。し。
又。初。め。の。村。より。あ。る。御。云。儀。法。度。の。越。又。町。内。の。作。法。
部。部。の。授。あ。と。お。く。り。守。せ。教。守。せ。て。半。初。雅。の。と。れ。
す。守。り。智。を。ぜ。ん。だ。篇。界。の。い。る。あ。る。又。母。た。る。人。の。所。居。
理。を。終。く。ん。は。初。め。の。比。より。も。り。智。を。ぜ。て。半。

○國。法。を。唯。一。ま。り。と。る。ど。と。む。け。が。さ。ぐ。り。地。獄。月。前。
○御。法。度。を。智。を。ぬ。や。に。守。る。ど。と。れ。ど。世。は。さ。む。人。の。大。切。
二。そ。同。一。と。あ。れ。い。の。知。れ。安。か。ん。半。を。お。ひ。て。安。は。

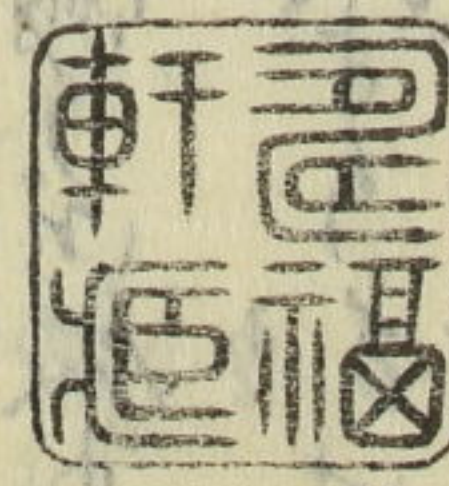
と。る。何。す。や。り。す。り。先。天。下。の。授。而。の。お。さ。て。家。の。定。先。是。
を。大。半。ま。り。ど。是。以。大。半。み。守。る。ど。れ。が。世。は。何。が。ど。
地。獄。月。前。と。い。て。安。は。さ。む。て。く。み。守。を。お。ひ。て。己。
然。以。先。せ。の。い。う。書。を。よ。ん。で。儒。者。は。あ。ん。と。り。と。る。
ら。ん。士。の。よ。う。士。は。あ。ん。と。り。と。る。ど。農。工。商。の。書。は。よ。ん。で。
只。家。を。守。る。を。智。を。ぬ。や。に。守。る。ど。是。は。道。の。い。ふ。と。
み。今。の。書。は。讀。者。の。儒。者。は。あ。ん。と。り。と。る。ど。た。る。と。
す。と。多。く。知。る。を。よ。ん。と。あ。て。名。は。ば。う。り。好。く。肝。心。の。
脩。身。の。意。の。い。う。と。是。何。と。い。う。万。遠。ど。や。人。の。心。得。

和漢の昔より賢人の教を見傳れたつとあり政
むる人もありてふ人は多くも世は善きといふる
やふありと形ふより。暫者蛇を要する
の瀬びくつ見ぬ。あまももの見む人々

文政十三年正月

東都下谷金相

壽福軒述



日用心法鈔卷之下大尾

固は儒佛神三道の語

古賢のいふ。君人今すは吾に候せん。何を以て
南来の福因を成せんとて去る作り。修を以て
今年豊饒は日代までといふ。今の豊饒は就
て。此の爲に耕作せんと。儉れせん。半穀ひは吾に
候せん。人の又かくの如く。私に表の事業を大に
いふ。裏より後すを形ひ。多く。の帰依法を
一節に候せん。是現世後す。取次る。ぬ。智者あり
又後す。あまもの。形ふ。人々。ぬ。といふ人あり。また

愚者あど既し現世あり未來ありてなりぬ道理あり
深く考へて後生に候ふひより必しもやらずと
あらん者未來に候ふ人候續るなり

○天地の理おせらるるなりぬものなり何れもまた候ふ
○命もいづれありて見よ夫れなりてはてしある
○聖人の言ぬとおし先の世に候ふものなり候ふもの
○歎みて念ひよりぬ魂がすく世の迷ひたるあり
○妻と子の智恵も宝ものなり候ふ念ひのほど死の連
世五そのお考へぬ者未來あり比喩ありい証はく

情といふもや。人あり家来あり。家来はれ毀し
いづれや。仕合のよきなり。要あり。仕合のよきなり。
換といふもや。夫れにて夫れなり。要あり。仕合のよきなり。
最悪なる。過去に候ふ。今世の身をたてし。これ
は。天の恨み。人をも恨み。身を恨み。此の世に
たふ業の報。候ふ。是未來あり。あはれ。或人の
いづれ。儒者達のこと。佛の説。方便ありて。実なる。教
有らせぬ。地獄極樂を。いづれ。又。神道といふ。事あり。あはれ
む。を。たづなり。又。神道といふ。事あり。あはれ

何れものおれ人なるい何故ありたるといふてもおれ難
し況や地獄極樂のわづら何ぞあるらんや。はくし出次
身はて人を迷ふを悪言あり。あうあう虫の故しあり
地子居る虫が出て蟬とあり。川子居る虫が蟻とあり。其
か虫が身てるんじ土にも灰もあるん其魂あると
をあるじ其か覺くの人あり覺くのもい人あり。
藤の上も下手あり。智慧のある者あり。又ある人あり
すくはばさうく人ありはのさけぬ人あり。瘡あり聲あり
夢の音悪あり。万半も身てつまあはじ。若くは来て

天の降るあ。皆一様の人して皆一様の苦樂を蒙る人あり
あて苦樂万あるん如何の欲あるん取つて先傷み着るんその
見ざるを情む。又屋漏れも恥ぢ。又如土のあり。この類
わづてうとくかじ。又誠の一字。又仁義礼智信の修け字い
るんじ積善の餘をあるん理あり。天より来て天
くまは餘をあるん餘殃もい。るんじ。夫はてん。聖結の虚
説とあるじ聖人は虚説は。皆実ん実結あるじ。信
じ。るんじ。皆福徳を得るんあり。余道をし
らんとて己まが道追けが。大愚といふじ。

古賢のいふ。神儒二道の中にも。上学の人、佛法は終
 中学の人、終ぜ侍らば。下学の人、唯侍ら。のこし。友
 を以て。る。時、仏法を侍ら。神儒あふ。小神儒とある
 通。初学の徒、書をよまんと欲して。儒門に入んと欲
 彼の朱子が。弊風を靡きて。仏家式とある。也。儒書は
 よむと。要は。余を侍ら。甚う。ちよ。く。あて。知。べ。く。ん
 や。余道を侍ら。より。先。余をすく。あ。ど。べ。の。う。ち。は
 侍ら。もの。は。お。道。も。あ。ぬ。もの。は。必。ず。朱子が。寂。滅。を
 真を。い。ふ。といふ。よ。だ。れ。を。好。む。と。あ。れ。朱子は

儒は妻友として仏法を誅し男は佛法を著しぬべし
 を受て考へもせず用するは虚を著て万実を傳
 するの得りあるべし。大ひは明徳を授けおられむ
 じきとて成済しんす。お身をうけ見るの實を成
 して是を學ぶをまるといふ
 明通僧第一紙法結の頭より。汝が身の上の
 汝が髪を剃る。汝が裁たるや。汝が眉の毛の
 裁身の上の毛の孔の毛の裁。汝が身の上の毛の
 何を以て地獄極樂を著んや。嗚呼至愚の

わうての上のこゝに五穀ありていへる穀城宝の何れせん
其五穀の中でも御米を第一とす。其耳熟味の御米が
沢山出来てゐる。食膳にても是福徳氣満の宝にあ
るや。天竺農具といふも御米を下り近沢山は食膳の
あつた後であつて、況や其年の秋は終つてや。御米
は世界一の宝あり。其御米城下り近沢山は飽満のあつた
勿体なきこと。大上り吉の君の國にお遠近の恩悦く
其上身を治めんを安んずる。或るいふ。土天竺の半近
藤江二國合せて終つて成集免めん。何一つしてく

かゞ述もせしむる。身ありていへるはすれたんこと。仕合を
あつて二玉の意味を毎へ。何れ支ある國といふべし。其
人の道を傳へる。所共ある。成出情を。時ある。よめて。
何れも入用勝ある。あつてくべ
聖徳あるのいふ。天下の政事。いふ。学ある。あつて。これ。まづ。
学成するのいふ。儒教神あり。或る。其。一を。好む。老。其。二
を。要んで。其。七。を。ん。を。欲。故。政。事。成。る。老。い。写。く
三。通。く。一。を。好む。屋。く。く。悪。く。く。二。成。好む。く。く。い。
政。事。を。知。ん。と。わ。り。是。は。お。遠。近。の。仁。と。神。と。儒。と。の。一

通是現世安穩後世極樂の積あり其種の中ての南無
阿彌陀仏が最上あり是は續く言法は末世の凡そ念仏を
よむるに現世後生の積利得るが如く也徳のうへ
○稱んがゆいのか成のふ。其難をよけて後生に成
すかるが如しといふ有難き念佛あり是を急成のまじ
あきど是は阿字十方三世の彌字一切諸菩薩陀字八万
諸聖賢皆是阿彌陀仏といふの念仏あり其心を古徳の
あま○一受ふ二世の仏に名成るて唱ふるなり唱へぬは
あしと又あま○佛をよつおますこの徳を口は南無阿彌陀

仏と唱へば一さし世にても念仏の切徳のまじはるこ
をよむあきど世阿字十方三世の彌字一切諸菩薩陀字八万
諸聖賢皆是阿彌陀仏といふの念仏あり其心を古徳の
あま○一受ふ二世の仏に名成るて唱ふるなり唱へぬは
あしと又あま○佛をよつおますこの徳を口は南無阿彌陀
は南無阿彌陀仏とな文字は書其上の方の阿字十方三世
佛彌字一切諸菩薩陀字八万諸聖賢皆是阿彌陀仏徳を
徳の字をいれて弥陀名その大切徳を知らむ御細く
弘法大師一切徳をえりて彼く思惟ある阿彌陀此二字

一切の諸仏の四徳一切の菩薩の四徳一切の諸佛の四徳一切の諸
阿彌陀の二字は綱目して諸依仏諸依法諸依僧の三
戒あり。是則ち仏法僧の三寶あり。又此の四徳阿彌
の二字は綱目して諸依仏諸依法諸依僧の三
あり。容易の事あり。又此の四徳阿彌陀を唱ふる者は
三十三方一切の仏法の四徳一切の菩薩の四徳一切の諸
あむの妙法は是よりして諸月身も唱ふるべし。諸
○空海が心の内は咲花の阿彌陀よりある。あふふと又
○極樂を人の夢に現れれば南無阿彌陀仏の口ほどあり

ける。此の二つの法ありてよくある。此の事尾州八事山諸
律師諸親あり。彈指上人諸親の末よりなり。人
人の世ををりて念仏の有が。ことををりて是
弘法大師あり。又天台大師も止観の二の巻は若人
阿彌陀の名号を唱ふるべし。則ち十方仏を唱ふる四徳といひ
きあり。但阿彌陀を唱ふる法門の多くをとり。其の
永明の智覚禪師傳教大師。慈覺大師。惠心僧正。隆聖法
師。諸親律師。法宅律師等。おけてかど。諸親。皆是仏法
中の大衆大衆あり。あるは皆阿彌陀の口念仏よりなり。

況や其の僧俗皆念仏よりくさるる苦のこそ然るに
愚律師の和讃は

十方諸仏多けれど

かゝるに形ありし

是ぞ火宅を出たりて

宝蓋の車あり

又珠璣寶衣始免に

三唱龍樹も天親も

南岳天台永明も

皆是淨土を期す

況や我等が愚る者

いふ形であらぬ

智者いよく形あり

愚者のすく我も

や、何んぞ是にて大徳方の念仏を唱へるをこれに非ざる

あはれ又我家の

元祖大師の尊名の名付の名字は「恒沙の切徳は

は徳の一初と傳ふ」と仰られたり。又此の念仏を盡く大利の徳

無碍の宝号といふ是より

聖神の好んで念佛を唱へる私をたる世のいそがしき中

あて毎日の万遍の御日課に勤免ふ其徳授け増上の一山

を始し十八の徳をあらわして十八檀林を御建立され

其外の尊い徳をあらわすに於て大寺一寺の御建立

は容易の事なり。其御志の清きこと及びたゞる處

ら原念仏の極の御信作て三軍の旗はすべて願離穢土
飲末降七の文又ハ利細即足弥陀号の文お書き軍を
何と云ふせられぬ事古今た先しあき清仕方あり。無文
のふ。世は予は早く死んで極樂へ往せんとするなり
無事にして念仏を御唱へては来世の成仏へなり
及んば現世の利益も蒙るあり。の最とんぬべし
神を以て来りては清く遠き平に治りては少く
波風あり。ゆは御政事の新届ぬ所もは四方八方共
王追皆降伏して。日々の御支配たりんとて成す。今ハ
地は近衛光寺御建立有て念仏を弘免む。是偏は

聖神の餘風あり。是よりして徳なり。去ハ文化十二
四月十一日。御神忌。御遠座の御勤誠は今日明日
聖神の二百年御神忌は。威光倍増。天下泰平。此
御為。又ハ玉恩報謝の御為。念仏をお勤むる。今日
樂々としてむるも。皆。聖神の清陰あり。若戦玉と
わく。ゆは安んず。皆の元。い。時分は。合せて有
か。さ。あり。玉恩を。ぬ。考。富。あ。お。と。は。是。小
よ。て。國恩の報。む。を。さ。あり。其。玉恩を報。む。と。い

人の極樂を往けんとす者親縁の下品よりなり末世の僧俗
念仏をよべし東叡山より出たる禁断日蓮教と云ふ者
又たり世通よりお遠し後世大半と云ふ人の僧俗は
以念仏よりくは南無阿彌陀佛の極善最上の法と云ふ現
世後世の福樂を得るの大道あり若し善法を修せぬ
人へ未來の極惡現世の苦しみ多くして後生の縁の玉と云
ふをば丈夫念仏より餘法が修しと云ふ人の持手
次第有縁の法よりといふも甚だおとく何れもあて
荒生利益の大道は只後世助けむ人の念仏よりと云ふ

上の文殊菩薩を始て諸宗の大師方念仏をとり
あて惜しむ又末法万生餘経悉滅弥陀一教利物極
増して末法万生の今も弥陀の正教念仏よりおに成仏せ
る所と云ふは衆人を古徳の教よりあへて後よりおは
今の世よりき世をみる門やあらんと徳なり者なり
○一向のあておとく念仏の上におは諸善万行の善量あり
や又○一箇の南無阿彌陀佛唱ふれば極樂の所より
あての常樂あされたり是より念仏の末世より利やく
あてをあらと又念仏の心安きと云ふあるは三有

元祖上人の御書

○罪といひ業といふは皆消る。事あるは法のあらはに
宣也上人の御書

一度も南無阿彌陀佛といふ人の運はよのちぬる
無終上人の御書

んふはあまのついでにふる。はるる。所名をさるる。
世を考て。易行易終の一念にといふ事。法然より
神儒仙の三途へ極くの善法あり。あるは已む。偏頗は
餘道を成る。三途はよ。法はわづら。法は

し。てもあれ。下と。まは。何ぞや。法は。ある。もの。あり。地獄
極楽を極くして。ぢ。ぢ。ぢ。を。欺。ま。い。て。合。点。あ。る。
了。簡。あり。何の。處。ま。ぢ。ぢ。を。解。一。も。や。れ。丈。仲。る。ぢ。
き。人。ら。さ。る。虚。言。偽。り。ぢ。い。ぢ。ぢ。や。大。法。王。二。界。七。揚。
る。何。ぞ。人。を。欺。一。玉。り。ん。や。仏。だ。は。玉。り。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。
を。た。ま。り。あり。大。惡。大。惡。人。とい。ふ。ぢ。ぢ。の。三。欲。清。淨。大。意。
悲。の。御。ん。を。ぢ。
人。を。解。を。ぢ。
偽。り。ぢ。ぢ。ぢ。虚。言。偽。り。ぢ。

世名目たもあつてちをたすべし。行援いこれ
 云ふんあつたのんが邪々引當て佛聖人の御心以計る
 何ぞあつてらんや。あつての人れいふて又耳にもさう
 居る。人の福徳を換て。未永劫の苦果はあ
 たりあつて。悪人あり。世惑ひを毎せんが局は愚昧は
 忘れて長言を贅を君子の人添削あて。こさう。さ
 智恵の悪言をとりひき。て下悪の人を苦道
 導さむ。

南無阿弥陀仏



日用心法鈔初編	三冊	主從心得草初篇	二冊
同	二編 三冊	同	二篇 二冊
同	三編 三冊	同	三篇 二冊
同	四編 近刻	同	四篇 二冊
		同	五篇 二冊

以上八部十九冊皆出板

東都書林

淺草新寺町

和泉屋庄治郎

